前記の如きは纔かに露命をつなぎつゝあつた當時の饑民達にとつての非常手段であつたことは云ふ迄もない。天保の饑饉に於て、幕末の勤王家にして畫家であつた渡邊登が天保七年京都三條橋、南の磧に自ら卒先して數個の救小屋を建て數千人の窮民を救助したることは有名な話である、彼が天保の饑饉の實狀を描ける「荒歳流民救恤圖」は十一圖より成つて居るが、(9) 救助を求めて御救小屋に蝟集せる窮民達の痩せ衰へた體を杖に支へ、既に歩行の力さへ無く地面を這ひ廻り居る樣は、坐ろに同情を惹き、思はず見る人の面を背けしむるものがある。彼が此圖の末尾に記せる略記御救小屋の活動を能く物語つて居る。曰く「天保七年丙申夏、雨水災を爲し、海內一般の凶稔にして、米價日々沸騰し、秋冬に至つて貧民飢饉の者甚多し、加之惡疫流行し、道路に餓死する者夥し、目下其慘狀を見るに忍ず、於是不肖定靜敎諭所儒師北小路大學助なる者と謀り、昔く都市の同志者を募り、官の許可を經て、同八年丁酉正月より三條橋南の磧に於て數區の小舍を結び、是を救小屋と唱へ、飢餓の流民を招集し、衣食醫藥を寄與し、死者は埋葬し翌九年三月に至て止む、凡十五ヶ月間也、救恤する者總て一千四百八十餘人、內死亡せし者九百七十餘人、死者埋葬の寺院七ヶ寺也、則五條坂、安祥院、砂川、常林院、繩手、西願寺、繩手、三緣寺、繩手、高對寺、寺町今出川、佛陀寺、六波羅、寶福寺」と。

以上の如き施米、施粥の炊出し、御救小屋の急造等が應急施設として行はれたのであるが、併し斯る施設も其限度があつたのであるから、到底全部の窮民が之によつて救濟される譯には行か

なかつたので、斯る救濟外に置かれたる窮民達は山野に草根木皮等を探索し之を食糧として漸く其露命を繋がねばならぬ狀況であつた。

註

(1) 本庄榮次郎著、常平倉の研究
(2) 小田吉之丈著、加賀藩農政史考六二〇頁
(3) 杉原謙著、澁戸太華翁一七九頁
(4) 金澤春友編、寺西代官治績集
(5) 梯崎彌左衞門義存著、天保中巳荒子孫傳（小野武夫編、日本近世飢馑志二四四—二四五頁）
(6) 農商務督編、大日本農政類編、七五頁以下
(7) 忌部正興著、凶年藏土穗（小野武夫編、日本近世飢饉志二一一—二一二頁）
(8) 猿橋義近著、自然未開記（小野武夫編、日本近世飢饉志一〇五—一〇六頁）
(9) 小野武夫編、日本近世飢饉志、口繪參照

第五　饑饉と代用食

前述せる如く德川時代に於ける饑饉年には、公私の恒久的又は應急的救恤對策が講ぜられ、其

成績の見るべきものも可なりあつたのであるが、然かも斯る救濟施設のみにて事足りたるならば決して悲慘なる饑饉の災害は起らなかつたのである。斯る救濟施設を以てしても救濟しきれざるところに恐るべき慘狀が惹起せられたのである。即ち救恤に與り得ざる饑民は勢ひ其空腹を充たさんが爲に種々の代用食を求めなければならなかつた。代用食を分ちて植物性代用食と、動物性代用食とする、植物性代用食としては既述の如く草木の根、莖葉、花實等が用ひられ、動物性代用食とは魚介野獸の類であるが、併し代用食の主なるものは何と云つても植物性のものであつた。而して當時の救荒植物即ち代用食の種類としては頗る多くの數が擧げられて居るが、故白井光太郎博士が古書を漁り口傳に聞きて著せる「救荒植物」に揭ぐるところの草木の種類は四百三十五種の多きに上り、古來の救荒植物の殆ど全部を網羅せるものと思はれるから、左に白井博士の「救荒植物一覽表」を揭げて以て德川時代に於ける饑民が食糧缺乏の結果如何に凡ゆる野性植物を食糧としたかを偲ぶことゝするであらう。

救荒植物分科一覽表

(甲) 單子葉門

香蒲科	ま	(嫩荀及根)
黑三稜科	うきやがら	(嫩芽)
眼子菜科	さゝも	(莖葉及根)
	ひるむしろ	(莖葉)
	くわゐ	(嫩芽莖)
澤瀉科	をもだか	(嫩葉)
	さじをもだか	(莖葉)
水鼈科	みづあさがほ	(葉)
	はとむぎ	(實)
	つゞだま	(實)
	ちやひきぐさ	(實)
	ひえ	(實)
	からすむぎ	(實)
	よし	(嫩荀及根)
	つばな	(嫩荀及根)
	まこも	(筍及實)
禾本科	えのころぐさ	(實)
	あはぬか	(粟糠)
	さゝ	(實)
	みのどめ	(實)
	しば	(實)
	しこくびえ	(實)
	もみぬかわら	(粗糠)
	すゞめのきび	(實)
	すゞめてつぽう	(實)
	くろくわゐ	(根)
嫩草科	ふとゐ	(嫩苗、根)
	かうぼうむぎ	(實)
天南星科	てんなんしやう	(根)
	さといも	(根葉)
	しやうぶ	(根莖)
鴨跖草科	つゆくさ	(嫩苗葉)
燈心草科	すゞめのひえ	(實)
	りうのひげ	(根)
	やぶらん	(根)
	りうきうゆり	(鱗莖)
	うばゆり	(鱗莖)
	おほばうばゆり	(鱗莖)
	おにゆり	(鱗莖)

かのこゆり（鱗莖）
くるまゆり（鱗莖）
えぞすかしゆり（鱗莖）
さゝゆり（鱗莖）
わすれぐさ（花及嫩苗葉）
ひめくわんざう（花及嫩苗葉）
かたくり（花葉根）
たけしまゆり（根）
百合科（つるぼ）（鱗莖）
なるこゆり（嫩葉及根莖）
あまどころ（根莖）
ひめいずい（根莖）
のびる（苗葉）
えぞねぎ（苗葉）
ぎやうじやにんにく（苗葉、梗）
かきいばら（實）
しをで（嫩莖）

石蒜科（したまがり）（葉）
やまかしう（根）
あまな（根）
きばのあまな（實）
しろばらのえんれいさう（根）
てんもんどう（鱗）
くろゆり（苗葉）
しらいとそう（鱗莖）
薯蕷科（ところ）（根）
きくばどころ（根）
やまのいも（根）
鳶尾科（ばりん）（葉）
蘭科（おにのやがら）（根）

（乙）双子葉門
離瓣草區
三白草科（どくだめ）（葉、根）

楊柳科（やなぎ）（嫩葉）
はこやなぎ（嫩葉）
楊梅科（やまもゝ）（實）
胡桃科（くるみ）（實）
殼斗科（ぶな）（果）
かし（實）
こなら（實）
くり（實）
くぬぎ（實）
はしばみ（實）
つのはしばみ（實）
榆科（えのき）（實）
にれ（實及皮）
むく（實）
桑科（くわ）（實及葉）
かうぞ（葉實）
くはくさ（苗葉）

いちぢく（實芽）
かなむぐら（嫩苗葉）
からはなさう（根）
蕁麻科（いらくさ）（嫩苗葉）
からむし（根）
やぶからむし（根）
みづ（苗葉）
くちなはじやうど（苗葉）
槲寄生科（ほや）（枝葉）
まつぐいめ（果）
檀香科（つくばねのき）（嫩葉）
馬兜鈴科（むまのすゝぎさ）（葉）
そば（苗葉及稃殼）
たで（苗葉）
いぬたで（苗葉）
みちやなぎ（苗葉）
みぞそば（苗葉）

蓼科
- つるどくだめ（根）
- いたどり（嫩筍葉）
- おほいたどり（葉、嫩芽、實）
- うらじろたで（實）
- すかんぽ（葉及根）
- ぎしぎし（嫩苗實）
- まだいわう（實）

藜科
- はゝきぎ（嫩苗葉）
- あかざ（嫩苗葉）
- はまあかざ（苗葉）
- くがひじき（苗葉）
- まつな（苗葉）

莧科
- いのこづち（苗）
- はげいとう（苗葉）
- のげいとう（苗葉）
- ひゆ（苗葉）
- せんにんにく（苗葉）

商陸科（やまごぼう）（葉、根）

蕁麻科（つるな）（葉）

馬齒莧科（すべりひゆ）（苗葉）

石竹科
- はこべ（苗葉）
- みゝなぐさ（苗葉）
- なでしこ（嫩苗葉）
- をほつめくさ（苗葉）

睡蓮科
- はす（葉、花、根、實）
- じゅんさい（嫩葉）
- おにばす（根、葉柄、實）
- かうほね（葉及根）

毛茛科
- にりんさう（葉）
- をきなぐさ（苗葉）
- をだまき（嫩苗葉）
- せんにれさう（葉）
- りうきんくわ（根及葉）
- からまつさう（苗葉）

- きつねのぼたん（葉）

木通科
- むべ（果）
- みつばあけび（果）

小蘗科
- いかりさう（嫩苗葉）
- なんてん（嫩葉）

防己科（つゝらふじ）（根及葉）

木蘭科
- こぶし（嫩芽葉）
- ほゝのき（嫩芽葉）

樟科
- たぶのき（葉）
- くすのき（葉）
- やぶにつけい（葉）
- やまこうばし（葉）

罌粟科
- くさのわう（葉）
- むらさきけまん（苗葉）
- えんどくさ（根）
- なたね（嫩苗）
- たねつけばな（苗葉及根）

十字花科
- えぞわさび（苗葉及根）
- なづな（苗葉）
- いぬがらし（嫩苗）
- すかした（嫩苗葉）
- みづたがらし（苗葉）
- いぬなつな（葉苗葉）
- ぐんばいなつな（葉）
- わさび（苗葉）
- やまがらし（嫩葉）
- くしらぐさ（嫩苗）

木犀科（ねづみもち）（苗葉）

景天科
- さはしをん（嫩苗葉）
- きりんさう（葉）
- ゆきのした（葉）
- だいもんじさう（葉）
- どとうづる（葉）
- きあまちや（葉）

虎耳草科

こあぢさい（葉）
ずいな（葉）
うつぎ（葉）
とりあしやうま（嫩苗）
えぞすくり（果）
こまがはゆすり（果）
とかちすぐり（果）
われもかう（嫩葉）
へびいちご（實）
をへびいちご（根）
しろばなのへびいちご（實）
かわらさいご（苗葉）
だいこんさう（根葉草）
きんみづひき（實）
きいちごの種類（實）
むめ（果及芽）
なし（果及芽）

あんず（嫩葉）
すもゝ（嫩葉）
もゝ（嫩葉）
なゝかまど（嫩葉）
ぶくりやうさう（根）
みつばかいどう（花及嫩葉）
はつしやうまめ（葉）
はまえんどう（實）
はぶさう（苗葉及花）
はぎ（嫩葉及實子）
ほど（根）
ぬすびとはぎ（實）
かはらけつめい（葉及實）
からすのえんどう（葉及莖）
たんきりまめ（實）
れんりさう（實）
なたまめ（嫩苗）

薔薇科

れんげばな（苗葉）
そらまめ（葉）
ねぶのき（葉）
なんてんはぎ（葉）
むまどやし（苗葉）
まめ（葉）
ふじまめ（葉）
くず（根及花）
ふぢ（嫩葉）
やはずさう（實）
やぶまめ（實）
すゝめのえんどう（苗葉）
しなかははぎ（苗葉）
めどはぎ（嫩苗葉）
さゝけ（嫩苗葉）
あづさ（嫩葉）
えんどう（葉）

豈科

こまつなぎ（花）
さいかし（葉及實）
猪牛兒科（げんのしやうこ）（葉）
酢漿草科（かたばみ）（嫩苗葉）
蒺藜科（はまびし）（實）
芸香科（こくさぎ）（嫩葉）
（さんせう）（嫩葉、果實、樹皮）
楝科（ちやんちん）（嫩葉）
遠志科（ひめばぎ）（嫩苗葉）
大戟科（ふつきさう）（果）
（ゆづりは）（嫩葉）
（にしきさう）（苗葉）
岩高蘭科（がんこらん）（果）
冬青科（もちのき）（葉）
衛矛科（まさき）（葉）
（まゆみ）（葉）
省沽油科（みつばうつぎ）（葉）

槭樹科（かへで	（葉）	
七葉樹科（とちのき	（果）	
鳳仙花科（ほうせんくわ	（苗葉）	
鼠李科 なつめ	（實）	
鼠李科 くまやなぎ	（實、葉）	
鼠李科 けんぽなし	（實、葉）	
葡萄科 のぶどう	（實、葉）	
葡萄科 やまぶどう	（實）	
錦葵科 いちび	（實）	
錦葵科 きはちす	（葉及花）	
錦葵科 かんあふひ	（葉）	
錦葵科 ぜにあふひ	（葉）	
錦葵科 をかのり	（葉）	
梧桐科（あをぎり	（果）	
猕猴桃科（またたび	（嫩葉及果）	
山茶科 つばき	（嫩葉）	
山茶科 ちや	（嫩葉）	

堇菜科（すみれ	（苗葉）	
胡頹子科 あきぐみ	（果）	
胡頹子科 なつぐみ	（果）	
千屈菜科（みそはぎ	（嫩苗葉）	
安石榴科（ざくろ	（嫩苗葉）	
柳葉菜科（あかばな	（苗葉）	
芰科 ひし	（軟莖及實）	
芰科 ひめびし	（軟莖及實）	
五加科 うど	（嫩葉芽及莖）	
五加科 いものき	（嫩葉）	
五加科 どんぜつ	（嫩葉）	
五加科 うどき	（嫩葉）	
五加科 たらのき	（嫩葉）	
五加科 はりぎり	（葉）	
五加科 はないかだ	（葉及果）	
五加科 はなうど	（葉）	
五加科 はまばうふ	（葉、根）	

はまゆり	（嫩苗葉）	
ながしらみ	（根）	
のだけ	（葉）	
むばのみつば	（苗葉）	
まるばたうき	（苗）	
すゝさいど	（葉）	
繖形花科 やぶしらみ	（苗根）	
繖形花科 ゑぞにう	（嫩芽）	
繖形花科 あまにう	（莖）	
繖形花科 あしたば	（葉、根）	
繖形花科 みつば	（葉）	
繖形花科 しやくな	（嫩苗葉）	
山茱萸科 さんしゆゆ	（實）	
山茱萸科 やまぼうし	（果）	
山茱萸科 あをき	（葉）	
山茱萸科 せり	（嫩苗葉）	
山茱萸科 すゞかせり	（嫩苗葉）	

合瓣花區		
合法科（しうぶ	（嫩葉）	
石南科 いはつゝじ	（果）	
石南科 おゝばすのき	（果）	
石南科 つるこけもゝ	（果）	
石南科 なつはぜ	（果）	
石南科 くろまめのき	（果）	
石南科 あかもの	（果）	
石南科 しらたまのき	（果）	
石南科 つゝじ	（葉）	
櫻草科（ぬまとらのを	（苗葉）	
磯松科（はまさじ	（嫩葉）	
梯樹科（かき	（葉、實）	
木犀科（ねずみせち	（嫩葉）	
龍膽科 りんどう	（葉）	
龍膽科 あけぼのさう	（根）	
龍膽科 あさゞ	（嫩葉）	

蘿摩科	がかいも	（嫩葉）
	ろくをんさう	（葉、實）
	すゝさいど	（葉）
旋花科	ひるがほ	（根）
	おゝひるがほ	（根、葉）
	あさがほ	（葉莖）
	ねなしづる	（莖蔓）
	はりあさがほ	（嫩葉、實）
紫草科	たびらこ	（嫩苗葉）
馬鞭草科	くさぎ	（葉）
	はつか	（苗葉）
	ひゐはつか	（苗葉）
	おどりこさう	（根、葉）
	たつなみさう	（苗葉）
	なぎなたかうじゆ	（苗葉）
	うつぼくさ	（嫩葉）
	くるまばな	（葉）

唇形科	じうにひとへ	（嫩葉）
	めはじき	（苗葉）
	えどま	（苗葉）
	えぞしろね	（根）
	あきてうじ	（葉）
	しそ	（嫩葉）
	ほゝづき	（葉、實）
	いぬほゝづき	（葉、實）
茄子科	ひよどりじやうご	（嫩葉）
	くこ	（葉、實）
	じやがたらいも	（根）
玄參科	くがいさう	（葉）
	とちのを	（葉）
	いぬのふぐり	（苗葉）
	かはぢさ	（苗葉）
	きり	（葉）
	さぎごけ	（苗葉）

胡麻科	ごま	（葉）
苦苣苔科	いはたばこ	（葉）
爵牀科	きつねのまど	（葉、實）
車前科	おほばこ	（嫩苗葉）
茜草科	やえむぐら	（莖葉）
	あかね	（葉、實）
	かはらまつば	（葉、實）
	どまき	（葉）
	がまずみ	（葉、實）
	かんぼく	（葉）
忍冬科	よのみ	（實）
	うぐひすのき	（苗葉）
	くさだつ	（苗葉）
	すいかずら	（花、葉）
敗醬科	をみなめし	（葉）
山蘿蔔科	まつむしさう	（根、葉）
	ちま	（實）

胡蘆科	からすうり	（根）
	つるれいし	（實）
	きからすうり	（根、葉）
	すゝめうり	（實）
	あきちやつる	（苗葉）
	つるにんじん	（根）
	ばあそぶ	（根）
	そばな	（根）
桔梗科	つりがねにんじん	（嫩苗、根）
	まるばしやじん	（苗葉、根）
	ききやう	（嫩苗）
	しでしやじん	（嫩葉、根）
	きく	（葉、花）
	あきのゝげし	（苗葉）
	ぢしばり	（苗葉）
	やくしさう	（苗葉）
	いはにがな	（苗葉）

にがな		(苗葉)
おにたびらこ		(苗葉)
たかさごさう		(苗葉)
すいらん		(苗葉)
はゝこぐさ		(苗葉)
あきのはゝこぐさ		(苗葉)
ちゝこぐさ		(苗葉)
かはらはゝこ		(苗葉)
はまあざみ		(根)
さはあざみ		(苗、根)
おはあざみ		(嫩苗)
きつねあざみ		(嫩苗葉)
もちぐさ		(嫩苗葉)
ぬまよもぎ		(嫩苗葉)
おとこよもぎ		(嫩苗葉)
しろよもぎ		(嫩苗葉)
のげし		(苗葉)
あきのきりんさう		(葉)
ほろぎく		(葉)
べにのはな		(嫩葉、子嶋)
おなもみ		(葉)
ぬなもみ		(嫩苗葉)
やまぼくち		(葉)
よめな		(嫩苗葉)
やまぢぎく	菊科	(苗葉)
をけら		(根葉)
かはらよもぎ		(苗葉)
かうぞりな		(葉)
よぶすまさう		(嫩葉)
たかさぶらう		(苗葉)
たんぽゝ		(苗葉、根)
むかしよもぎ		(葉)
のぶき		(嫩葉)
のゝぎりさう		(葉)

のしゆんぎく	(苗葉)
くるまばはぐま	(葉)
さゝやつで	(葉)
やぶれがさ	(嫩葉)
もみぢさう	(嫩葉)
やくしさう	(苗葉)
おにたびらこ	(苗葉)
はんどんさう	(葉)
ふちさはぎく	(葉)
をぐるま	(葉)
ふき	(葉)
えぞぶき	(葉)
どぼう	(葉、根)
せすほんやり	(葉)
せんたんぐさ	(葉)
がんくびさう	(葉)
さんしち	(葉)
ふくわうさう	(葉)
しゆんぎく	(苗葉)

總計四百三十五種

以上は山野自生の植物類であるが、更に、近海に於て比較的容易に手に入るる事の出來た水産物――植物並に動物――も重要なる代用食として用ひられたのであるが、其大略を擧ぐれば次の如くである。(1)

藻苔類

昆布、褐帶菜、荒布、石花菜、恵期草、蠣菜、袋海苔、鹿角菜、海羅、神馬草、雪海苔、菜、索

魚介類

乾鰯、乾鯛、鹽鯛、乾鱈、乾鮪、乾引鮭、鯡、數ノ子、鹽乾鮭、經節、鮪節、乾鮑、乾榮螺、乾鮹、海鼠

偖て、以上の救荒植物や水産物中には、山野海中自生の儘のものを採りて直ちに食用と爲す事の出來るものもあつたが、大部分は直ちに食用となす事の出來ないものであつた。即ち此等の救荒植物並に海産物等を食用に供せんが爲には夫々一定の使用法が講ぜられなければならなかつたのであつて、或は煮沸し、或は乾燥して粉となし、或は他の調味料と調合して始めて食用と爲し得たのである。若し斯る使用法を辨へずして自生の儘のものを直ちに食用に供するならば、内臓を犯され果ては一命をさへ奪はれたのであつた、代用食物の使用法には其れ故に特に注意しなければならなかつたのである。蓋し代用食物の使用法は頗る多樣に亘り、當時の人々が種々研究したのであるが、今左に再び白井光太郎博士の「救荒植物」中より若干の使用法を抽出して記し、以て代用食物使用法の如何に煩雑であり手數を要するものであるかを見ると共に、當時の窮民が如何に細心の注意と苦心を重ねねばならなかつたを窺ふこととするであらう。(2)

いちぢく 若芽をよく灼で、よくさはして食ふべし、實は若さ時粉糖と鹽とに漬て食ふべし。

いぬたで 葉灰湯にて煤、水を加へ浸し、鹽味噌に調食ふべし。

はちす 嫩葉を煤熱し、水を換へ浸し、鹽味噌に調食ふべし、若芽若葉はゆで食べし、老葉は煎粉にすべし、花は煮ても食ふべし。

はぎ 實を舂て米となし水に洗ひ粥又は飯に炊きて食ふ、葉は蒸曝し茶となすべし。

ほうせんくわ 葉を煤て水を換へ、浸すこと一夜、鹽また味噌醤油に調食ふべし。

とちのき 實皮を去り、水を換へ煮ること數遍、水に浸すこと一夜蒸熟て食ふ。

ところ 根を横に剉み、能煮て流水に一夜浸し、苦みを去、又は灰湯にて能く煎熟し、水を換へ浸すこと二夜の後蒸して食ふべし、又米麥などに合せ炊きても食ふべし、但虚人は多く食ふべからず。

さくひきくさ 實を舂て皮を去り、粉となし、餅に造り食ふべし、嫩葉は搗て其汁を採り、米粉に加へ餅につくり蒸して食ふべし。

おにばす 葉柄の嫩きを蔬として食ふ、地下莖亦食すべし、味芋の如し、炒り食ふ、又粉を取り團子とすべし。

をけら 根を採り皮を去り二三日水に浸し、苦味を去り、煎熟して食ふ。

からすうり 根皮を去り薄く切り、水に浸すこと四五日、度々水を換へ、搗爛かし濾し水飛すること十度餘りして粉となし、或は燒餅又は煎餅に造り食ふべし、但し蕨粉と合せ食ふべからず。

ふしら 根を能く蒸し又によく煤、苦みを去り皮を剝き食ふべし、或は藁などの熱灰に埋み、蒸燒にして食ふべし、實も根と同樣にして食ふべし。

たんぽぽ 葉を煤、水に浸し食ふべし。葉と一同にゆで煮ても食ふべし、又漬物にもすべし、根はゆで食ふべし又細に切て飯に交へ食ふべし、又磨麵にすべし。

そてつ 莖心を取り、細かに截斷し、臼に入れ搗き碎き能く水飛し澤粉をとり、餅とす、そてつ餅と云ふ實の仁生食すべし。

つつらふじ 根及葉を採り油鹽に調ひ食すべし、根至て細長きものなり。

なるこゆり 嫩葉を煤り、水に浸し苦味を去り食ふ、根は數遍蒸し曝し能く熟せしめ食ふ、若芽はゆで食ふべし、老葉は干て煎粉にすべし、根はよくゆで、よく浸して食ふべし、汐浸し足らざればえぐして食にくし、又飯を炊とき根を飯の上に置きてよく蒸して食ふべし。

むめ 若芽よくゆで浸し黃色になるまでよく〳〵さはして食ふべし。

うつぼくさ 嫩葉を灰湯にて能煎し、水を換へ浸すこと二夜調食ふべし。

くぬぎ 實をどんぐりと云ふ、皮を剝き水を換へ、浸し煮ること十四五度、澁味を去よく蒸熟して米粉に和へ餅にして食ふべし、又能く煎り流水に二三日浸よく毒氣澁みを去ものなり、但老人小兒は食ふべからず、若葉よくゆで浸して食ふべし、水につけ置き惡味を去り淨粉にすべし。

まつ 松の白皮をつきて水に數度ひたし、よくむして穀を交へ餅となし用ふ。

ぎやうじやんにんにく 嫩苗根煤熟し調食、又生にて鹽に漬食を好とす、又根を搗き餅となし、或は寸斷し乾し、貯へ美となし食ふ。

しうね 根の肥大のものを採り粃漬にし、又は煮食ふ。

したまがり 勢州粥見にては飢饉年に團子とし、へそび團子と云ふ、此物毒あり妄りに食す可らず、鱗莖を採り細に搗き碎き、水飛し澱粉をとりて食すべし。

ひめかいふ 根を刻み搗き、水飛して澱粉を製すべし。

以上は救荒植物中の若干種類に就きての使用法の一端を語つたのであるが、[3] 之を以て見ても、當時の饑民が如何に其食糧を得るに困難を嘗め且つ百方手を盡して其調理法に苦心したかを窺はしむるものがある。

更に饑饉時に於て注意せられた事は、有毒植物の鑑別に就てである。即ち空腹に堪へ兼ねた饑民が手當り次第に有り合せの自然物を採つて食用となすの結果、有毒植物とも知らずして食用に供し、其の爲に命を落し、或は病に犯される者が尠くなかつたから、其難を逃れん爲に有毒植物に對する知識も相當に普及されて居つたのである。「備荒錄」[4]に擧げられて居る有毒植物の種類は次の如く多數に上つて居る。

菌芋、羊躑躅、楊櫨、狼芽、斑杖、博落廻、馬藜、防葵、馬兜鈴、白屈菜、莨菪、蒜藜、藁、

地湧金蓮、甘青、蘭如、藜蘆、龍葵、龍珠、甘遂、大戟、澤漆、大麥、草木黃精、葉鈎吻、草蘭茹、象頭花、雲實、山馬蝗、烏頭、貫衆、狗舌草、野芋、射干、曼陀羅花、曼生鈎吻、芝花、虎掌、金副篡、鐵色箭、天南星、牽牛子、罌子桐、醉木、山慈姑、蒴藋、さじおもだか、芹葉鈎吻、及已、蕪、蕘牛扁、きけまん、鬼縛、ゆきもちさう、梫木、南陸、紫葳、常山、蜀羊泉、毛茛、木本黃精葉鈎吻、木藜蘆、莽草石蒜、仙茅、石龍芮、石南花、水仙、醉魚草

以上の如き有毒植物を過つて食料となした結果、高熱を發し、精神錯亂し、痙攣、額上粘汗、唇口紫黑、大煩渴、吐血、吐涎、脈勢沈微を起す等の症狀を起して苦痛を訴ふるのであつた。

偖て、斯くの如き有毒植物を過ち食して罹病したる時には如何なる手當を爲したかと云ふに、當時は勿論醫療の設備も少く、其技術も幼稚であつたから、科學的手當等の出來兼ねた事は勿論であるが、然も當時なりに夫々の解毒法、或は手當法が講ぜられたのである。特に饑饉時に於ては食あたりによる病人が續出したから、上司に於ても毒けし法、或は食養生とも云ふべき應急の手當法が相當研究せられて居つた。左に饑饉時に用ひられた毒けし法、食養生の若干を示すであらう。

享保の饑饉に於ては饑民は空腹の餘り種々の草木を喰うて其命をつなぐ有樣であつたから、饑民の食毒に中りたる者多く、享保十八年幕府は之を憂ひて觸書を出し、次の如き十二ケ條の手當法を示して居る。(6)

一、一切の毒にあたりたる時、鹽をぬるま湯にかき立飲てよし、草の葉を喰ひあたりたるにはいろ〳〵よし。

二、胸くるしく腹腸痛むにはクララを水にてよく煎じ飲めば食ひたるものを吐出してよし。

三、大麥の粉をいりて石湯にて度々飲てよし。

四、口鼻より血出でくるしむには、葱を刻み水一合入能煎じて幾度も飲べし、血出ること止て後呑てもよし。

五、大粒なる黑豆を水、能煎じ、幾度も用ひてよし、魚の毒にあたりたるにはいよ〳〵よし。

六、赤小豆を黑燒粉にして蛤貝一つづゝ水にて呑てよし、獸の毒にあたりたるにはいよ〳〵よし。

七、菌を喰ひあたりたるは、忍冬の葉莖ともに生にて嚙汁を呑てよし。

八、右は一切の食物の毒にあたり又は色々の草木魚菌鳥獸などを喰つて煩ふに其害を遁るべし。

九、時疫には大粒なる黑豆を能いりて一合に甘草一匁水にて煎じ時々呑むべし。

十、茗荷の根と葉を搗き汁を取呑べし。

十一、牛房を搗汁を茶碗半分程づゝ二度呑其上桑の葉を一握りほど火にて能あぶり黃色になりたる時茶碗に水四合入れ一杯になし汁を取てよし。

十二、體熱殊の外強く、氣遠の如く騷き苦しむには、芭蕉の根を搗汁を取呑べし。

以上と同様の事は「天保年中巳荒子孫傳」[8]並に「救荒孫之杖」[9]（同書にては挿書になつてゐるが其意味は大同小異である）中にも記載せられてあるが、右御觸書が享保の饑饉に於ける饑民の食毒に中りたる者の救濟に大いに效果ありたることは、斯く數書に汎く轉載せられて居る事實に見ても充分判るのである。尤も「救荒孫之杖」には右の方法以外に更に數種の方法が示されて居る[10]、即ち曰く「○一切雜食の毒に中りたるには、童便に乳牛をまぜ呑みてよし、酢を飲むもよし、○鷄の矢をやき細末にして呑むもよし、○赤く熱したる棗の實を含ませ、其汁を呑は死したる者も回生る、○又雜食して大便たまりたるには、蕎麥粉貳匁半、大黄粉一匁、右二味寢る時酒にて給へる、○二便通ぜざるには、桃葉をつき其汁をのむ、○又食毒に中りたるには、五加の根を煎じてのむもよし」云々、而して農家の解毒材料中鹽と味噌とは最重要視せられたものゝやうである、現に天保の饑饉に際し秋田の老農高橋正作は「飢歳問答」に於て語りて云ふ、薪と鹽と味噌とは饑饉時に於ける三大必須品である、この三品あるに於ては總ての五穀絶えたりと雖、尚よく草根木葉を以て代用食となし其命を全うし得ると、今日吾人の生活に必要不可缺のこれらの三品が德川時代に於ても亦必要不可缺のものであつたことは牢記するに値する。[11]

(1) 江本清彌編述、救荒要錄、七頁
(2) 白井光太郎著、救荒植物三七頁以下
(3) 救荒植物及使用法は次の史料にも數多く見えてゐる。
荒年充糧志、司法省刑事局飢饉資料、救荒志、伊藤圭助著救荒植物便覽、其他救荒獻議、荒救必携、佛荒錄、きゝんのこゝろえ、高橋正作著飢歳問答
(4) 佛荒錄（司法省刑事局、飢饉資料三二八—三三〇頁）
(5) 京都府勸業課、植物集說、三三頁
(6) 救荒志、一二七—一三〇頁
(7) 饑年要錄、一九一二〇頁
(8) 梯崎彌左衛門義存著、天保年中巳荒子孫傳（小野武夫編、日本近世飢饉志三一四—三一五頁）
(9) 枕雲洞著、救荒孫之杖（小野武夫編、日本近世飢饉志四一四頁）
(10) 〃 （〃 〃）
(11) 高橋正作著、飢饉問答一一頁

結言

以上德川時代の饑饉と食物に就き敍述するに當り、其の重點を專ら代用食物の種類並に其調理

法及び有毒食物中毒に對する解毒法等に置いたが、同時代の饑饉が一に懸つて食糧の絶對的缺乏に原因したものである以上、饑饉歳の食物と其使用法は最重要なる觀察點であるべきである、既に屢〻述べたる如く、德川時代の社會經濟は封建制度の下に於て孤立的且つ閉鎖的であつたが爲に、一度凶作に襲はるるや該地方は直ちに食糧不足となりて、彼の維新後、縱令一地方に凶作起るとも完備せる交通機關と流通貨幣とを以て立ち處に所要食糧を他地方より融通し得て饑饉の極苦に陷るのを防ぎ得る狀態とは頗る其趣を異にするものであつたのである。斯の如く德川時代の饑饉に於ては何を措いても食物が第一の問題とせられ、之が補充又は代用食物の探索は急務中の急務であつたのである。德川時代の窮民が食を求めて狂奔し、殆ど食ふに堪へざる草根木葉を口迄にして僅かに其生命を繋いだる慘憺たる狀況は、當時の社會經濟事情の充分なる理解と相俟つて始めてよく首肯し得られるものであつた。

第六篇　農業俚諺考

一、俚諺の興味

俚諺とは人間社會に於て文字に記さるゝことなく、人の口より耳に傳はる教訓又は事物を定義したる斷片語である。

今日の如く人間社會の凡てのことが文字に記され其れが、皆學問としての取扱を受け、其文字を讀むことによりて人倫五常の道やら、生活の法則やらを學び得らるゝ時代に於ては、最早俚諺の必要を感じないけれども、住時人民の教育の方法甚だ不完全にして、文字と眼とを以てする學問の方法發達せず、人皆な祖先仕來りの慣行を追うて生活の方法を習得しなければならぬ時代に於ては、俚諺は倫理の綱常であり、自然法の解義であり、又經濟生活の理法を示す指針であつたのである。

俚諺は多數の人の知識を集積したものであり、經驗の歸納であり、調査の結論である。隨て其は其物の性質又は運動の方向を示す定義であり、萬人に通じて用ひらるべき法則である。

既に文字に記されざる法則であり、定義であるからには常に簡明にして、其用語は鋭く、寸鐵骨を刺す慨のあるものが多いのは當然である。是れ思ふに、吾人の先祖が俚諺を案出し、之が社會的効用を發揮せしむるには其の用語を成るべく切り詰めて刺戟性に富ましめ、且つ記憶に便ぜん爲めには一言克く人の肺腑に迫る底のものたらしめんとする努力の加はつたことゝ思はれる。

平凡なる俚諺が時代と共に消え失せて唯優秀なるもの〻み今日迄現存する理由は玆に在る。

俚諺の數は甚だ多からうが、今農業に關するものばかりに就いて見ても、其の分類は可なりに多く、又其が利用せらるべき方面も廣い。例へば、農業俚諺中其技術に關するものに付て云へば

1. 鼠を飼はば猫を飼へ
2. 松はやせ地に生える
3. 田の草は畑に入れろ
4. 畑の草は田に入れろ
5. 葱には小便
6. 莨には壁土
7. ひでり胡麻

の如きは養蠶林業作物栽培に關する幾多の人より得たる結論の寸語である。更に又農業經濟上に於ては

1. 猫の手も借りたい時
2. 小村から公事を起す
3. 田畑は岸の草色を見て買へ
4. 主人の足跡は肥になる

5. はき溜は肥壺

の如きは農經營上の要訣を數言の中に語り盡したものである。更に又農業に最も關係深き氣候の觀測に就ては

1. 夕虹は晴
2. 夏の夕燒には鎌をとげ
3. 秋の夕燒には櫃をはなせ
4. 鍋尻に火がつくと日和
5. 羽蟻の出る日は日和

の如きは農家が其日の天候を見定むる上に於て知つて居なければならぬ心得であるが、吾人の先祖が是丈けの結論を導き出すまでには、數十たび幾百たびかの天候觀測を試みた後に之を歸納したるものであらねばならぬ。若し其れ人間の共同生活乃至は個人の處世上の法則として殘れる

1. 器用貧乏村の用たし
2. 出る杭は打たるゝ
3. 石部金吉、金かぶと
4. 寢て居て人を起すな

の如きは、今日の倫理學書の幾冊にも勝る重味と眞理を其中に藏して居る。

以上は單に農業俚諺としての實例の若干を示したものであるが、此他全國に亘り一般的のものまでも採集したならば、實に多數の有益なる寸言が見出し得らるゝことであらう。

俚諺は斯の如く幾多の經驗の結論であり、又諸現象の定義であるから、之を人間社會に於ける常識のエキスであるとしても不可はない。故に俚諺の分布は一地方に局限せらるゝことは稀であつて、多くは東西南北に廣がり、遠方にまでも波及する場合が多い。奥州の俚諺が薩摩に於て用ひられ、又東北地方の俚諺が四國に行はるゝが如きは珍しからぬことである。現に四國の伊豫地方に於て行はれたる「寢て居て人を起すな」との俚諺が秋田の老農故石川理紀之助翁が實踐躬行の守り言葉として青年子弟の教訓に用ひたる「寢て居て人を起すこと勿れ」と符號するが如きは著しい例であるとしても、此種のことは外に尙ほ數へ切れぬ程あることであらうと思ふ。

斯く數へ切れぬ程多い俚諺を何時頃何國の何某が發明したと云ふやうな源泉は誰でも知りたいに相違ないが、實際には望み得べからざる詮議である。故に甲地と乙地とに同じ俚諺が行はるゝ場合に、何れが發生地なるかの本家爭の始まることがあつても、其れは結局未解決で物分れとなるに極つて居る。

之を要するに俚諺は其の昔、文字はあつても文字を使用することの尠かつた時代に於て、一般人民社會に行はれた耳學問の「教科書」として其存在が認められ、其文言中の寸鐵骨を刺す如き眞理や定義に敎へられて、當時の人々は處世の妙諦に通じ、社會生活の道義を解し、又は農業技

術上に於ては天地の攝理を察して風なきに風を知り、雨なきに雨を測つて過失少き一生を送ることが出來たのである。

今や文字を使用すること湯水の如く、學校教育は非常によく發達して、最早田舍の村に於ても俚諺の必要を感じなくなつて居るけれども、永い年月の間、吾人の祖先の生活の指南車であり、「教科書」であつた俚諺をむざ〳〵現代人の忘失の塵埃中に埋めて仕舞ふのは惜しい。殊に農業俚諺中の或るものに至ては百冊の農業經濟書や、氣象學や、栽培汎論を讀みて始めて知り得らるべき重要なる結論が、唯一句の俚諺中に盡されて居る如きは、今後と雖、永く之を保存して死滅させない工夫をなすが良からう。

二、俚諺蒐品

久しい以前から農業に因みある俚諺を蒐集したいとの希望は伊豫國松山の史國者西園寺源透翁の惠贈によりて滿すことが出來た。

西園寺翁は同地稀に見る篤學の士であつて、其齡は既に耳順を過ぎて居るけれども、尙ほ屹々と豫史の研究に熱中し、閑暇あれば請はるゝ儘に出でて土地の青年に伊豫史を講じ、傍ら史料を蒐集して後進學徒の研究に供へようと努めて居る。余は大正十三年一月、學用を以て松山市に遊び、初めて同翁に接し、爾來親交を續けて居るのであるが、其年八月、翁は特に余の爲めに永年

蒐集せられたる俚諺を淨書して贈つて呉れた。其蒐集せられたる俚諺の數當に三百四十餘、中には農業の技術に關するものもあり、天候に關するものあり、又教訓に關するものもある。固より日本に於ける農業俚諺の凡てを盡して居るとは云はれないけれども、其大部分は此中に現はれて居るやうに思はれる。四國の人は勿論のこと、之を讀む九州の人も、中國の人も亦東北地方の人も等しく曾て聞いたことのある俚諺として、又は耳新しい寸鐵錄として受取らるゝであらう。

繰り返して記すべきは、此の俚諺集は何處までも農業に因める俚諺の蒐品であると云ふことである。若し此他一般的のものまでも蒐めたならば、其數は更に增加することであらう、斯くて農業と云ふ狹い部門に限られてある丈け、西園寺翁の惠與を一層嬉しく思ふのである。

翁が此蒐品を余に贈らるゝに際しては、左の序文が特に附けられて在つた、錄して翁の厚意を感謝する。

一余壯ニシテ縣農會議員タリ、郡農會長タリシ時、少シク農事ヲ研究シタルコトアリ、其際旁ラ農ニ因メル俚諺ヲ集メタルモノ即チ是レナリ

一俚諺ハ見聞ニ隨ヒ記シタルモノナレバ分類モナク次第モナシ

一俚諺中ニハ一般的ノモノアルモ、農家ニ關係多キモノト認メタルモノヲ取レリ

一俚諺ト雖教訓アリ、譬喩アリ、諷刺アリ、誡告アリ、實用アリ、理論アリ、之ヲ適所ニ應用セバ利スル所アラン乎

一此集要ハ鷄肋ニアリ、之ヲ取ルモ益ナク、之ヲ捨ツルハ惜シ、故ニ之ヲ淨書シテ篤學ナル小野君ノ机下ニ呈ス、取捨ハ君ノ選擇ニ任スノミ

大正十三年八月十一日夜　　富水回者識

俚諺覈品

一、一時の只居り七年の疵
一、若い時の辛抱買うてもせよ
一、稼ぐに追付貧乏なし
一、ひら〳〵貧乏
一、酒はすき腹、麥ははだ肥
一、樂は苦の元、苦は樂のもと
一、一日の計は早朝にあり
一、一月の計は朔日にあり
一、一年の謀は元朝にあり
一、一生の謀は若き時にあり
一、平生の謀は家内和順にあり
一、正月に米高ければ其年は高うならぬ（米價の事）
一、彼岸の寒

一、彼岸過てのつんぼどえ
一、彼岸前に接木せよ
一、暑いも寒いも彼岸まで（春秋の彼岸を云ふ）
一、五月中日（夏至）に田植すれば不作がない
一、虎御前の涙雨（五月廿八日に雨ふる事）
一、五月五日、十六日、廿五日は牛の休み日
一、右の日に牛を使ふと牛が失せる（又火事があるとも云ふ
一、坎日に田を植ゑな
一、半夏水
一、ながせ（梅雨）のむしあがり
一、五月は竹の植時、八月は竹の切時
一、木六月に竹八月（切時を云ふ）

一、二つ八月は風が荒らい
一、田の草は畑に上げよ
一、畑の草は田に入れよ
一、朝虹は雨
一、朝虹にかさを持て
一、夕虹は晴
一、朝ぼろ（小雨）すれば日和となる
一、朝曇りは百日の旱
一、菜種の花盛りに嫁が來い（食物少き時）
一、柚子の片うれには娘が來い（食物の多き時）
一、夏の夕焼には鎌をとげ（日和の事）
一、秋の夕焼には樞をはなせ（降雨の事）
一、朝虹に川向へ行くな（雨のふる事）
一、詩を作るよりいもを作れ
一、女房の言ふ事は向ひの山も傾く

一、嚊旦那は無事太平
一、女のはるものは張子ばかり
一、藥九層倍、百姓百層倍
一、寒帷子に夏布子
一、例れる稻は露を拂へ
一、穗水を忘れな
一、二百十日の風
一、二百二十日の風
一、世善柿に、けかち栗
一、雨栗、日柿
一、門げかち
一、旱に不作なし
一、百姓の去年作
一、牛は寢る樣に飼へ
一、馬は起る樣に飼へ
一、極道の節句働き

一、極道の重荷持
一、おぢを見れば荷が重たい
一、豌豆は竹の根を切る
一、正五月に喧嘩すな
一、蚕の四月に蚊の六月
一、花見虱
一、左舞ひをするな
一、麥は百日の蒔時に上々の熟色（うれいろ）
一、牛は牛づれ
一、人は人中、田は田中
一、貧すりや鈍する
一、蒔かぬ種ははえぬ
一、油斷大敵
一、出る杭はうたるゝ
一、用心に亡びなし
一、石部金吉、金かぶと

一、石橋をたゝいて渡る
一、器用貧乏、村の用たし
一、飛んで火に入る夏の虫
一、深うちすれば金が出る（深耕）
一、主人の足跡は肥になる（田畑を見廻りする事）
一、茄子畑は打たれぬ
一、瓜と茄子は取るほど大分なる
一、左鎌に山を見せな
一、蕎麥は山で作れ
一、早稻はうまうて石が少い
一、晩稻は米がわるうて石が多い
一、貧乏人に子あり、山柿に核あり
一、百姓ほど美食する者はない
一、柚子は寒地がよい
一、橙は暖地に限る

一、扇さすより、鎌をさせ
一、田休には病人ができる（酒食を過す事）
一、牛歌を謠ふと牛が喜ぶ
一、猫の手もかりたい時（麥秋田植）
一、山見て狩せよ（見込ない事を爲すな）
一、西がすくと日和となる
一、朝の好天氣はあてにならぬ
一、濃い茶がのめる（生活の安樂なる事）
一、水音が近く聞こゆれば翌日は雨
一、はつたあとは腹がへらぬ
一、しめつた畑をうつな
一、草屋根の家は冬暖かで夏涼しい
一、鍋尻に火がつくと日和
一、ゆるりばた都で、雪隱が長旅
一、半夏のはげあがり
一、十月の投げ木
一、土用の照込米はさがる

一、長者三代
一、百姓はふとりも遲いが亡ぶるもおそい
一、てり〳〵天上
一、土に入ればうつとうしくなる
一、味噌桶を出せば雨がふる
一、牛蒡はいやじりを嫌ふ（地味に飽く）
一、蛇たまがし（八月に冷き事）
一、瓜の虫は朝露にとれ
一、はきだめは金壺
一、社日がきたら水をかけな
一、げんげのはへる處は上田
一、田畑は岸の草色を見て買へ
一、五月の中の十日に心なしに雇はれな
一、十月の中の十日に心なしに雇ふな
一、夏至は一年中の長日
一、冬至は一年中の短日

一、燕の巣くふ小家は縁起がよい
一、道ばたの稲は馬に食はれる
一、春分秋分は晝夜のふりわけ
一、冬至よりは犬の目程づゝ日が長くなる
一、夏至よりは犬の目程づゝ日が短くなる
一、芋名月（仲秋）
一、豆名月（舊九月望）
一、二朔八朔は出代り
一、羽蟻の出る日は日和
一、思ひ立つたが吉日
一、牛蒡は春秋の彼岸にまけ
一、水煙は冬にたつ
一、もやは夏にたつ
一、冬の野山は淺し
一、夏の野山は深し
一、春風は朝日に寒し

一、秋風は夕日に寒し
一、霞は朝うすく夕べに深し
一、霧は朝深く夕べにうすし
一、海の音は晝さわがしく夜靜なり
一、川の音は晝靜かにして、夜さわがし
一、十月十日の風定め
一、神の留閑には風が强い
一、土用三郎は米の値定め
一、冬四郎が一番寒い
一、十月の小春、十一月の小六月
一、八日吹
一、庚申風（風邪）
一、有る時世帶
一、逢うた時に肌をぬげ
一、濡れ手で粟をつかむ
一、寢て居つて人を起すな

一、塵も積れば山となる
一、一粒萬倍
一、二荷ん一荷ん
一、一時一事
一、一事が萬事
一、時は金
一、勞働は神聖
一、一文をしみの百失ひ
一、しわん坊の柿の核
一、急ぐ道はまはれ
一、馬の耳に風
一、牛の角に蜂
一、獨活の大木（役に立たぬ）
一、辛抱は金
一、目くら蛇におぢず
一、負うた子に敎へられて淺瀨を渡る

一、せいは道によつて賢し
一、重荷に小付け
一、十分はこぼれる
一、足りぬを足ると思へ
一、八人合又腹八合
一、一日一度たまり（糞壺）をませる者は出世する
一、朝寢晝寢は貧乏の本
一、山の草は土地をこやす
一、雪は豐年の貢ぎ物
一、松は瘠地にはえる
一、杉は肥地でなからねばふとらぬ
一、杉は濕地を好む
一、檜は乾地を好む
一、八十八夜つみし茶をのめば中風にかゝらぬ

一、蕗には小便
一、茗には壁土
一、ひでり胡麻
一、苣卵（悪）
一、夕立（驟雨）は作物をいかす
一、霖雨は作物をくさらす
一、梟は雨を呼ぶ
一、鳥が噪げば雪がふる
一、雉子は地震を知る
一、日が強ければ蟬の聲が高い
一、草うつむきて雨を知る
一、草なびきて風を知る
一、雨氣あると鯉が浮き出る
一、井戸が俄かに減れば雨がふる
一、夜水音が高ければ雨がふる
一、木の花は朝にさく

一、事の花は夕べにさく
一、茗と蕗と茄子と牛蒡はいやぢりを嫌ふ
（年に續て同作する事）
一、わき菜（間引菜）時分に痢病ができる
一、朝梅干を食へば無事
一、初物を食へば七十五日の災難をよける
一、七日七草雜煮を食べば其年の災難をよける
一、屋人の午睡は三尺蔭（日光三尺移る間）を例とす
一、川上手は川で果てる
一、山上手は山ではてる
一、田は下から掘れ、溝は上からさらへよ
一、欠所（けつしよ）の門へ馬をつなぐな（財産を沒收せらるゝ家の事）
一、家地（家敷）に煙草植ゑよ

一、米は新米がうまく、麥はひねがうまし
一、闇夜まはりに竹を切れ
一、水につけた竹は蟲が入らぬ
一、もうける考より使はぬ考をせよ
一、朝粥に夕雜炊（農家の食事）
一、大木の下で小木そだつ
一、若木の下で笠をぬげ
一、鼠を飼へば猫をかへ
一、山に里ああり、京に田舍あり
一、稻麹は豐年にできる
一、蕎麥は蟲つかずくさらす故に備荒に適す
一、五月五日に雨あれば實りよし
一、春の社日と四月八日に雨ふれば果惡し
一、燕雀などが高く飛べば日和、低くとべは雨となる
一、鳶の舞うた翌日は雨がふる

一、親のわるいと味噌の悪いは直し樣がない
一、時ならぬ寒暖は雨と知れ
一、暑き時冷くなれば雨
一、寒き時暖になれば雨
一、雪のふり出しは寒い
一、雪が積めばぬくい
一、日月が暈を着れば雨
一、日暈黑ければ大風雨
一、早朝よりふり出す雨は早く止む
一、月の入より降出せば長雨
一、朝燒がすれば雨が近い
一、早年には蚊が多い
一、瓜類の節（ぶし）近き年には大雨風がある
一、日の入に西がすけば天氣
一、秋の朝霧なき時は雨
一、朝霧深きは日和

一、夜あがりの雨は長持せぬ
一、四月廿八日に雨ふれば其年の夏天氣續く
一、人を使ふは使はるゝと思へ
一、落日の家に盗人がはいる
一、雷雨の時樹下に休むな
一、雷雨劇しき時道を走るな
一、梨の多き年は風が吹く
一、蜂が高く巣くう年は風
一、蚊柱の立つ年は風がある
一、麻の中の蓬は直し
一、雨ふつて地堅まる
一、仲裁は時の氏神
一、早起千兩
一、瓜の蔓に茄子はならぬ
一、枯木に花
一、枯木も山の賑ひ

一、借る時の夷顔、返す時の閻魔顔
一、去年に不作なし
一、鼻はたれてもまめがよい
一、小家から火事を起す
一、小村から公事（くじ）を起す
一、泣く子と地頭には勝てぬ
一、地震、かみなり、火事、親父
一、人には添ふて知れ、馬には乘つて知れ
一、正直の頭に神宿る
一、兎も三年すりや三つになる
一、七月の太鼓じち
一、高い所へ土持ち（左り舞をする事）
一、近い火で手をあぶる
一、近い處に垣をせよ
一、年寄は片つめて使へ
一、鶯の朝なきは雨

一、處かはれば品かはる
一、郷に入て郷に從へ
一、夏の火は線にたかせ
一、秋茄子は線に食はすな
一、なる程ちぎる秋茄子
一、坊子みつくり山のいも
一、低い處に水が溜る
一、七度び尋ねて人をうたぐれ
一、話は庚申にせよ
一、花は櫻木、木は檜の木
一、人事いへば人が來る
一、壁に耳あり
一、骨折損のくたびれまうけ
一、彼岸過ぎての麥の肥（むだのたとへ）
一、古木に手をかけな
一、若木に腰をかけな

一、負けるが勝
一、餅には砂糖麥飯にとろゝ汁
一、六日のあやめ、十日の菊
一、桃栗三年
一、やけは貧から
一、貧の盗みに、戀のうた
一、燒石に水
一、行がけの駄賃
一、次手の便かり
一、道しるべと親の恩
一、山の峠で日を見るな
一、山奥の千筋道
一、界ばりをしても、死んだ時の供飯（二合半）丈
一、朝露に草を刈れ
一、夜なべに縄をなへ

一、雨ふりに米搗げ
一、苗はわいて植ゑよ
一、苗代は芽干せよ
一、田は深水が毒
一、淺水は草がとれぬ
一、藁うちは米一升にかへられぬ
一、利口貧乏、馬鹿の世持
一、笑ふ門に福來る
一、怒る家へは貧乏神が來る
一、我田へ水を引く
一、俵かつぎがともかつぎを笑ふ
一、駕籠は寢る間がない
一、紙すきは遊ぶ間がない
一、夕立の雨は肥になる（溜へ入れよ）
一、梅雨に竹を植ゑよ
一、雨年は籾糠が多い

我田引水

一、赤土にはうまいものができる
一、音地は作ができぬ
一、みゝずの多い土は肥えて居る
一、土龍はやせ地に居らぬ
一、唐岩のある處は肥えて居る
一、雨あがりに草をひけ
一、春雨に池をみたせ
一、歌へ飲め働け
一、胡麻はながぞれてまけ
一、働く時はたらいて、休む時に休め
一、竹に實がなる年は凶年
一、麻畑と桑畑とには雷が落ちぬ
一、施餓鬼は蟲除になる
一、社日に鍬を使ふな
一、二た六十はいきられぬ
一、友引の日は葬式するな

一、乾の角に榎をうゑよ
一、寢る時にねて起る時におきよ
一、山椒の傍でうたを謠ふな

一、山椒苗は外へ移植すれば辛味がなくなる
一、山椒は實まきにせよ
一、小糠壹合半あれば養子にゆくな

三、俚諺の教化價値

生一本の理論で行けば、僅か一行か二行かで足る事柄を何十枚にも書き延ばして人に讀ませることが今日の行き屆いた人間の教育法と見られ、又學校教育にしても、昔の人には金釘一本で打ち込まれた物の道理が、今日では二度も三度も教場で繰り返し〳〵教へられて居るから、出來の好い子供は先生の教授に倦怠を生ずる代りに、頭の鈍い子供は學校の教科を心から嚙緊めることが出來ると云ふ所に、今の學校教育の特徴がある。

洵に社會教育でも、學校教育でも今日は成る可く物事を引き伸して教へることが重んぜられて居る、演釋一點張りの教授法である。斯くの如き現今の教育社會に於て歸納法を本則とする俚諺の如きが次第に人に疎んぜられて忘れられようとするのは、自然の傾向ではあるが、應用の仕方によりては今の世にも俚諺の役立つ方面がないことはない。

俚諺を葬つて仕舞ふは惜しいことながら、左ればとて、之を餘り屢々人の耳目に觸れさせることは考へ物である、俚諺は理論の無垢であり、結論であり、又定義でもあるから、其の語には含

12131

書があり、鋭く尖つて居る、故に一語克く人の肺腑を貫くの慨があるけれども、其の耳目に觸ることを除りに屢々なるときは、自ら刺戟性を失うて、氣の抜けた酢や酒のやうに、人に飲ませても甘酸の味が舌の尖で感ぜなくなる。「貧乏暇なし」とか、「牛に牽かれて善光寺詣り」とかの如く猫も杓子も知つて居る俚諺は、赤兒の泣き聲にも均しい陳腐さを聽者に與ふることを忘れてはならぬ。

俚諺の蒐集と保存には力を盡くさねばならぬが、然かも或る俚諺が優秀だからとて、其の功用を世間の人に押し附けてはならぬ、俚諺の生命は其の表現の珍稀と簡明と鋭利なるに在るのであるから、平生は成る可く之を仕舞つて置いて、時たま人に示すやうにすべきである、懐中藥の「仁丹」の廣告用に利用せられて居る泰西大家の金言でも、日がな夜がな電信柱に雨晒しにされては、威嚴が臺無しになる。又舊い時代の俚諺を採集して保存することも結構ではあるが、日に月に移り行く今の世の事物の現象や道理を俚諺に練り上げて新しい俚諺を作り、之を人の口から耳に移すことにより、製紙原料の「パルプ」の種切れを防止する手段とはなり得ぬにしても、田舍の青年の頭腦の練磨の一方面としては役立つであらう。諺は興味もあり、又有益でもあるが、之に社會教化の價値を持たせるには、適當なる取扱方と應用上の工夫が必要である。

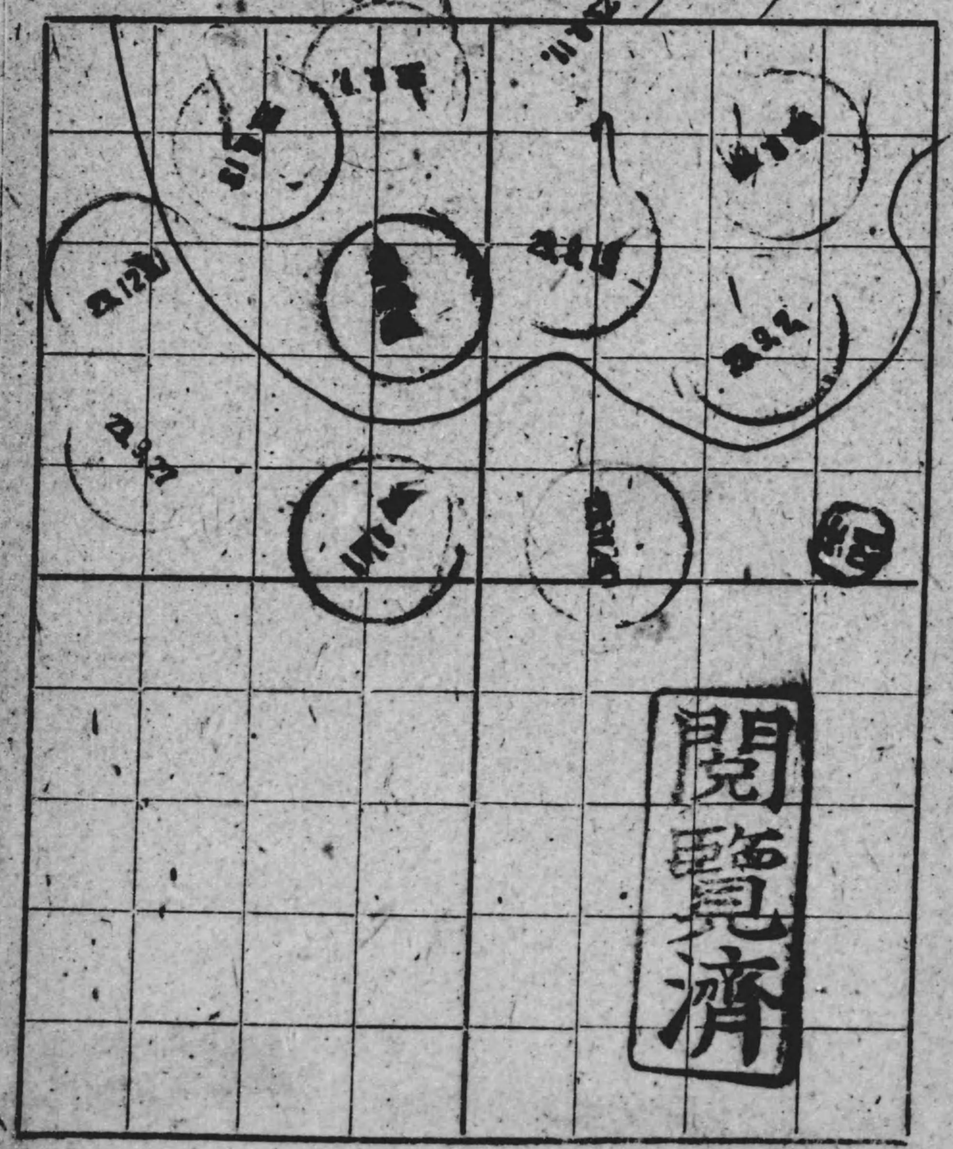
日本村落史考
定價百八拾圓

昭和二十三年四月十五日　印刷
昭和二十三年四月二十日　發行

著者　小野武夫
發行者　小坂佐久馬　東京都千代田區九段二ノ十七（九段ビル）
印刷者　沼知悦次郎　東京都新宿區市ケ谷加賀町一ノ十二
印刷所　大日本印刷株式會社　東京都新宿區市ケ谷加賀町一ノ十二
發行所　株式會社穂高書房　東京都千代田區九段二ノ十七（九段ビル）電話九段（33）五三四〇番　日本出版協會會員A二〇八〇九一

302.1
0.67

年 23.月.23 日 37



閲覧済